『小町集』における「山里」

ー屏風絵の「山里の女」との関わりからー

服部友香

はじめに

『小町集』は小野小町の他撰家集であり、三十六人集の一である。片桐洋一氏の研究[注1]により、これは『古今集』『後撰集』所収の小町歌の他、明らかな他人歌をも含めた「小町的」な歌々を増補して成立したものであり、歌人、小町の実像を伝える資料というより寧ろ小町説話の源泉として捉えるべきものである事が明らかにされた。「小町的」な歌とは、題材や表現に『古今集』、『後撰集』の小町歌との共通性が見られる歌、説話的な小町像の影響で収められた歌であり[注2]、歌語りの中で小町詠と見なされたり、『小町集』の編者によって意識的に増補されたものと見られる。現存する『小町集』伝本の系統は以下のようである。

（一）冷泉家時雨亭文庫蔵唐草装飾本[注3]……四五首
（二）神宮文庫本系統[注4]……六九首
（三）静嘉堂文庫蔵（一〇五・三）本系統[注5]……九一首
（四）歌仙家集本系統[注6]
　（a）書陵部（五一〇・一二）甲本……一二五首
　（b）書陵部（五〇六・八）乙本系……一一六首
　（c）正保版本系……一一五首

この内、冷泉家本、神宮文庫本系統、静嘉堂文庫本系統の三系統には、歌仙家集本系統の正保版本七七番歌以降の歌が一切見えない。また正保版本七七番歌以降の歌はそれ以前とは性格を異とし、無常観的要素が強く、異なる意識の元に増補されたものと考えられる。よって本稿では正保版本の一から七六番歌の内、三系統以上の伝本に見える歌を『小町集』の基幹部分として重視したい。現存諸本の原型が成立したであろう『拾遺集』時代に既に『小町集』に収められていたのが、これらの歌と見られるからである。[注7]

さて、『古今集』及び『後撰集』の小町歌に「山里」の語を詠んだものは存在しないが、『小町集』には「山里」

を詠んだ歌三首が見える。中でも以下に掲げる一首は四伝本の全てに見え、基幹部分を為す歌である。[注8]

秋の月のあはれなるを

山ざとのあれたるやどをてらしつゝいくよへぬらん
あきのよのつき　（冷泉）

（冷泉17、神宮49、静嘉16、歌仙10）

本稿ではこの歌が『小町集』の中で、如何なる状況にある〈小町〉―即ち、小野小町本人ではなく、『小町集』に於いて描かれている虚像としての小町―の詠とされているかを明らかにし、『小町集』に於ける山里はどのような場所か、また『小町集』の撰者により、〈小町〉と「山里」という場所が何故結びつけられたのかについて考えてみたい。

一、従来の見解 ―隠棲する〈小町〉―

当該歌は従来、老残の〈小町〉が厭世の念を起こして山里に閑居した際の詠と解されてきた。前田善子氏は当該歌を、『平家物語』の大原行幸の一節を偲ばせる「侘しさに徹した老年の心境」が詠まれた歌であると述べ、[注9]片桐洋一氏は『小町集』では〈小町〉が「憂き世を捨てて山里に隠れ住んだという設定」の元に、当該歌を始めとした「山里」の歌々が収められたとする。[注10]こうした解釈は島内景一氏[注11]も指摘するように、歌仙家集本系統で当該歌の三首前に置かれている歌に由来していよう。

やよやまて山郭公ことづてんわれ世中にすみわびぬ
とよ　（歌仙）

（『小町集』歌仙7、他本になし。『古今集』夏、152）

これは『古今集』夏部に三国町の歌として収められており、明らかな他人歌である。この歌では山から来て山へ帰る存在である「山郭公」に対して、山に隠棲する人に私が「世中にすみわび」ている事を伝えてくれ、と詠んでおり、『小町集』に於いては「世の中」の苦しみから逃れて「山」に住む事を望む〈小町〉の詠として読める。そして「やよやまて」歌と当該歌に関係を見た場合、当該歌は「世中にすみわび」て隠棲した老〈小町〉が月を眺め、物思いに耽っているものとして理解される。そのような所から、『古今集』の次の詠人不知歌も『小町集』に収められることとなったのだろう。

山里は物のわびしき事こそあれ世のうきよりは住よかりけり　（歌仙）

（歌仙110、他本になし。『古今集』雑下、944）

さて、「山里」の語は『萬葉集』に見えず『古今集』に初出であり、「平安京周辺の郊外の山中の人里、山村、山家」[注12]を指すと考えられる。『古今集』に於ける山里は華

やかな都と対比される、物寂しい不毛の地であるが、それ故に都の価値観や煩わしさから離脱を図る事が可能であり、都に比べれば「かえって住みよいかもしれない地」[注13]と位置付けられる。但し、斎藤由紀子氏[注14]が指摘するように、「山林・野山に入る・まじる」は出家の表現として用いられるが、山里は「宗教的空間への過渡的な場としてもちこされ」る「不本意ながらの生活の場」で、厭世によって為される山里住みは即ち出家ではない。

そして、都での女の存在意義は男との関係無しには有り得ない。故に「山里」は男女関係としての「世の中」から逃避した女が隠棲する場として機能していた事が『源氏物語』の雨夜の品定めに於ける左馬頭の発言から窺い知れる。

艶にものはぢして、うらみ言ふべきことをも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをづくり、心ひとつに思あまる時は、言はん方なくすごき言の葉、あはれなる歌を詠みおき、しのばるべき形見をとゞめて、深き山里、世離れたる海づらなどにはひ隠れぬるをりかし。

（「帚木」①四一頁）

その具体例としては『後撰集』の「山里」に籠もる女の詠（雑二の一一七四、一一七五番歌）、『伊勢物語』一〇二段の尼となり山里に籠もった「あてなる女」、『うつほ物語』の実忠北の方と袖君、そして『源氏物語』の夕顔が挙げられよう。「世の中」の煩わしさを厭い、恋愛を拒否して隠棲するのが彼女たちの取った方法であった。

このような平安前期の「山里の女」像は、歌仙家集本系統に於ける当該歌の理解と重なるものである。

二、屏風絵の「山里の女」

しかし、歌仙家集本以外の、他系統の『小町集』諸本には、当該歌は収められているものの「やよやまて」歌及び「山里は」歌が見えない事に注意したい。山里住みを希求し、そこに安住する〈小町〉の姿は、歌仙家集本系統以外の『小町集』に定着していないのである。[注15]

また、神宮文庫本系統の当該歌の詞書に「山ざとにて、秋の月のおはりに、むつれしに」とある。慣れ親しむという意の動詞「むつる」は以下のように、男女の逢瀬の様を表現する語として用いられる事がある。

恋のごとわりなき物はなかりけりかつ睦れつゝかつぞ恋しき

（『後撰集』恋一583、詠人不知）

わがせことさよのねごろもかさねきてはだへをちかみむつれてぞぬる

（『好忠集』I 272）

この詞書は、当該歌が恋を放棄した老〈小町〉の詠ではなく、山里で恋人と逢う〈小町〉の詠として理解され

ていた可能性を示唆していよう。

そして、一一五首以上の歌を収める歌仙家集本系統では当該歌は一〇番歌で、家集の最初の部分である。歌仙家集本系統は「緊密とはいえないものの、歌物語的構成」[注16]がなされており、当該歌の後に『古今集』『後撰集』所収の小町歌や、出所不明歌、他人歌を配列して〈小町〉の恋愛の諸相が語られてゆくのであるから、一〇番歌の時点で老いた〈小町〉が厭世の念を起こして山里に住むと解するには違和感が残る。

笹川博司氏は、「山里」と「月」を詠み込んだ歌が勅撰集では『後拾遺集』に初出であり、そこで「月」は仏道修行の場としての山里を照らす「宗教的象徴」として詠まれていると指摘する。[注17]『後拾遺集』以降の価値観に則って当該歌を解する事により、当該歌は「世」を逃れて山里で仏道修行をする老〈小町〉の詠嘆として理解されたのであろう。そして歌仙家集本系統の『小町集』は当該歌をそのように位置付ける為に、三首前に「やよやまて」歌を挿入し、〈小町〉が「世中にすみわび」て山里に住み、月を見るという流れを作り出したのではないか。

それでは本来、当該歌は如何なる状況にある〈小町〉の詠と見られていたのか。『小町集』の原型が成立した『拾遺集』時代までの文芸作品に見られる「山里の女」が一様に「世の中」を遁れた存在として捉えられる訳ではない事に注意したい。山里を詠んだ屏風歌は『貫之集』をはじめとした『古今集』撰者時代以降の私家集に散見されるが、その中には山里に住む「女」の絵を見て詠んだものが少なくない。

やまざとなるをんなに、をとこきてものいふ
ゆふぐれになればきこゆるすゞむしをおもふばかりのたよりなりせば　（『忠見集』Ⅰ47）

やまざとなるをんな、しかのねをきゝて
つまこふとしかなくときになりにけりわがひとりねをたれにきかせむ　（同、57）

ゑのところに、やまざとにながめたるをんなあり
ほとゝぎすなくに
宮こ人ねでまつらめやほとゝぎすいまぞやまべをなきてすぐなる　（『道綱母集』38）

ゑに、やまざとなるをんなの、つらつえをつきて、人まつかた、かきて侍しところに
すみしれる月とみつるにこと、はん人まつよひの秋の山かぜ　（『兼澄集』Ⅱ134）

このような「山里の女」は、隠遁者ではなく「人まつ」

存在として捉えられる。『古今集』撰者時代以降の山里の景を詠む屏風歌の隆盛や、貴族の山荘が「山里」と称されて積極的に山里の自然美が見出されるようになった事により『拾遺集』時代の山里観は物寂しい不毛の地から、風流を楽しむ非日常の空間へと変質した。[注18]

亭子院歌合の時、よめる　　伊勢

見る人もなき山里のさくらばなほかのちりなんのちぞさかまし

（『古今集』春上、68）

というように、観賞する人もなく季節が終わる事が惜しまれていた山里の自然美は、却って他人が賞翫しない故に独占可能なものとなる。そして山里の「美」は、山里に隠れ住む「女」と重ねられ、山里で美女を見、独占する事が中央の貴族たちによって夢想されたのであろう。一人の男を待つ女とは、その男に独占されている女に他ならない。そして女が、他にその価値を見出す者が居ない「見る人もなき山里」に在る事により、男の独占は強固なものとなる。このような独占への欲求が「山里」の恋、そして「人まつ」女という画像を作り上げたのであろう。なお『後撰集』には次のような恋歌が見え、この頃には「山里」が隠遁の場のみならず、男を待つ空間として認識されていた事が分かる。

男の「来む」とて来ざりければ

山里の真木の板門も鎖さざりきたのめし人を待ちし宵より

（『後撰集』恋一、589、詠人不知）

さて、山里で男を待つ屏風絵の女の系譜を引いた、物語の女君としては『源氏物語』の明石君、及び浮舟が挙げられよう。

明石を出て大堰に住む明石君は「山里の人」「おほきおとゞの山里にこめおき給へる人」と形容される。源氏はその「山里のつれづれ」を慮るものの、宮仕えや紫の上の存在といった公私の憚り故に訪れは間遠となり、彼女は「おぼつかなき」我が身の憂さを嘆く。

また浮舟は父親である八の宮に認知されず、受領の後妻となった母、中将の君と共に東国へ下る。その後、薫により宇治という「山里」に「隠し据ゑ」られる。

すると、身分が低い、もしくは「鄙」の育ちである事が「山里の女」を構成する要素と想定される。身分や出自故に正式な妻とは認められず、山里で高貴な男性と密かに逢瀬をもつ女が「山里の女」であり、身分差と「山里」の都からの距離との故に、男の訪れは間遠であったのであろう。

三、閨怨詩と「衣通姫の流」―空間と時間の隔絶―

このような「山里の女」は、僅かな資料から推測され

る「小野小町」という人物と重なり合う部分が大きいと論者は考える。『古今集』仮名序に於いて小町の歌は「衣通姫の流」とされる。ここでの「衣通姫」はその詠が『古今集』墨滅歌や異本歌に見出せる、允恭天皇の皇后の妹、弟姫であろう。『日本書紀』允恭天皇条によれば、彼女は姉の嫉妬により宮廷に入れず藤原宮や河内の茅渟に住み、天皇の訪れを待っていたという。以下に『古今集』墨滅歌や異本歌中の衣通姫歌二首を掲げる。

思ふてふ言のはのみや秋を経て下
衣通姫の、独り居て、帝を恋ひ奉りて

わが背子が来べきよひ也さゝがにの蜘蛛の振舞ひかねてしるしも　（墨滅歌、本来、恋四688の後にあり）

衣通姫の帝に献歌

とこしへにきみもあへむやいさなとるおきの玉も、よる時々に　（元永本　恋五761の次にあり）[注19]

「わが背子が」歌に詠まれている「蜘蛛」は閨怨詩に散見されるものであり、[注20]またこの二首に詠まれているのは天皇との「空間的隔絶」によって齎された「時間的隔絶」[注21]の中で「時々」しか来ぬ帝を待ち、「独り居」る衣通姫の姿である。この衣通姫の姿は閨怨詩に描かれる、寵を失った宮女や帰らぬ夫を待つ女の姿と重なる。

一方『古今集』所収の夢の歌をはじめとした小町歌の発想、表現に閨怨詩の影響が見られる事については後藤祥子氏、山口博氏の指摘があるが、[注22]『古今集』所収の小町歌一八首中、六首が夢で恋人と逢う事を主題にした歌である事は注目してよい。二人の間に障害が存する故に、現実の代替として希求されるのが夢の逢瀬であった。そして以下に掲げる夢の歌からは、空間的、時間的な相手との隔絶により、現実の訪れは稀であり、僅かに「夢」でしか逢う事が望めない小町の恋が読み取れる。

思つゝ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを　（恋二、552）

現にはさもこそあらめ夢にさへ人目を守ると見るがわびしさ　（恋三、656）

ゆめぢには足もやすめず通へども現にひとめ見しごとはあらず　（恋三、658）

このような「衣通姫的」な女の姿を想起させる歌故に、小町は「衣通姫の流」と呼ばれたのであろう。これらの夢の歌には詞書がなく、小町が如何なる状況で詠み出したものかは不明であるが、歌の内容から、小町の実人生も「衣通姫的」であり、現実世界で恋人と自由に逢う事が出来なかったものと想定された可能性は高い。[注23]

そして、これらの歌々を詠んだ小町の出自についての平安期の認識であるが、『古今集』の仮名序は「古の事

をも、歌をも知れる人、詠む人」を言うのに「官、位、高き人」を除外した上で、小町たち六歌仙を「近き世に、その名聞えたる人」として挙げる。即ち六歌仙とは官位は高くないが和歌に優れている者なのである。また、時代は降るが『古今集目録』に小町は「出羽國郡司女」とあり、「郡」の育ちと見られていた可能性がある。こうした出自は先に述べた「山里の女」のそれと重なる。故に、小町が「衣通姫的」な歌々を詠み出した背景として、衣通姫が宮廷から離れた場所で天皇の僅かな訪れを待った如く、都から離れた「山里」において来ぬ人を待つという状況が想定されたのではないか。そして『小町集』基幹部分の編者も、そのような山里で待つ小町像に影響を受けたのではないか。

四、「荒れたる宿」と「山里」

さて、以上述べてきたような「衣通姫的」な『古今集』の小町歌や『古今集』撰者の小町観と当該歌の関わりを考える時、重視すべきは第二句「荒れたる宿」である。これは中野方子氏[注21]によれば蜘蛛の巣が張り、寝所に塵が積もり、庭に草が繁るという、閨怨詩の来ぬ人を待つ女の邸宅の形象に由来する歌語という。邸宅の荒廃は居住者の窮乏故の事であり、よって「荒れたる宿」は親の死や男の来訪の途絶により精神的、物質的な拠り所を持たない女の住居として、そして男女の出会いの場として次の様に描かれてゆく事となる。

守空閨　妾独啼　虚座塵暗　空階草萋

（『文華秀麗集』52、朝野鹿取「奉和春閨怨」）

良岑の宗貞の少将、ものへゆく道に、五条わたりにて、雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば、（…）階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣、うへに着て、たけだちいとよきほどなる人の、髪、たけばかりならむと見ゆるが、

よもぎ生ひて荒れたる宿をうぐひすの人来と鳴くやたれとか待たむ

とひとりごつ。

（『大和物語』一七三段）

築地など崩れたるが、さすがに蔀など上げて、簾かけ渡してある人の家あり。（…）築地の崩れより見いだして、この女、

人のあきに庭さへ荒れて道もなくよもぎしげれる宿とやは見ぬ

と書きて、いだしけれど、もの書くべき具、さらになかりければ、ただ、口移しに、男、

誰があきにあひて荒れたる宿ならむわれだに庭

の草は生さじ　（『平中物語』三六段）

また、当該歌には「月」が詠み込まれているが、中国六朝の閨怨詩にも、平安初期のそれにも「明月」が「空閨」を照らすという類型が存在しており、[注25]よって「月」と「荒れたる宿」の女の組み合わせは、来ぬ男を待つ女性が独り寝をかこち、月を眺める様の表現となる。

此日愁思春草萋　階前花積妾不掃（…）愁向高楼明月孤　片時枕上夢中意　幾度往還塞外途

（『文華秀麗集』53、巨勢識人「奉和春閨怨」）

日夕君門閉　孤思不暫安　塵生秋帳満　月向夜床寒

（同、57、巨勢識人「奉和長門怨」）

かくて、のちもなほ間遠なり。月の明き夜、うち臥して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞こゆ。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでもたれに告げよと　（『和泉式部日記』三七頁）

あれたるやどに月みる女あり、水にかげうつりたるに、また人なし

いかにすむ水にかゝげのかよふらんとしくるごとにくる人もなし　（『輔尹集』58）

そして以下に掲げる『源氏物語』の箇所では、女を独占する場としての「山里」と「荒れたる宿」である末摘花の屋敷が重ねられている。

いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖たかげに降りつめる、山里の心ちしてものあはれなるを、かの人〳〵の言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし、げに心ぐるしくらうたげならん人をこゝに据ゑて、うしろめたう恋しと思はばや、…　（「末摘花」①二二六頁）

ここで源氏に「かの人〳〵の言ひし葎の門」と回想されているのは、雨夜の品定めに於ける「世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかにらうたげならん人の閉ぢられたらんこそ限りなくめづらしくはおぼえめ」（「帚木」①三七頁）という発言である。「世にありと人に知られ」ぬ場所での、理想の女性の占有への欲求が語られる場面と言える。そしてそこに住む女は男以外に頼る相手も無く、不安と希望との間で揺曳しながら相手を待ち続ける事となる。

以上の事から、「山里」の「荒れたる宿」で「月」を眺める女の姿が読み取れる当該歌も、歌仙家集本系統以外の『小町集』では、己の意志で遁世した〈小町〉の詠ではなく、山里の荒れ果てた家で男を待ち、月を眺める〈小町〉の詠として理解されていた可能性がある。

すると「いくよへぬらんあきのよのつき」は、「月」

の光が荒れ果てた空閨を照らす長い年月への詠嘆と解せるであろう。「いくよ」には「幾世」と「幾夜」が掛けられている。月夜には男の来訪が期待されるが、相手が来ない場合、物寂しい「山里」に在る〈小町〉は月を眺めて心を慰めるしかない。そして相手が来ないまま日数は経ち、〈小町〉は月の満ち欠けに訪れがないその月日の長さを実感するのである。

さて、次に掲げる『古今集』の小町歌二首は、小野小町という人物が時間の経過、則ち「経」ることによる「花の色」や相手の「言の葉」の「うつろひ」を注視し、詠嘆していた事を窺わせる。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに　（『古今集』春下、113）

今はとてわが身時雨にふりぬれば事の葉さへに移ろひにけり　（同、恋五、782）

当該歌は、この「うつろひ」への注視の姿勢をも受け継いでいる。月日が経つにつれ荒廃してゆく家は、〈小町〉の容色や恋人の心の衰えをも暗示している。定期的な相手の訪れと経済的な援助があれば、住まいが「荒れたる宿」となる事はない。そのような中で変わらず自分の元を訪れるのは、「幾世」も前からこの山里を訪れ続けていた「月」のみだというのである。不変の存在である「月」と対比する事により、「荒れたる宿」の語から喚起される相手の恋心の「うつろひ」はより鮮明になるのである。

五、出所不明歌の内の山里関係歌

さて、特筆すべきは『小町集』基幹部分の出所不明歌の中に当該歌の他にも、山里の光景を詠み込んだ、山里で待つ〈小町〉の歌と認定される歌々が存在している事である。

つまこふるさをしかのねぞさよふけて我がたぐひはありとしるなり　（冷泉）

（冷泉15、神宮34、静嘉53、歌仙58）

この歌の上二句で詠まれているのは、妻を求める牡鹿の物悲しい鳴き声である。その声を聞いた詠者は、牡鹿と自分は夜が更けても恋人に逢えず思いを募らせている点で「たぐひ」即ち、同類[注26]だと感じる。

ここに「山里」の語は直接詠み込まれていないが、「鹿」は秋の山、もしくは山里の景物として詠まれるものである。前掲した『忠見集』Ⅰ五七番歌はその一例であり、他にも以下のような用例が見られる。

山邊庭（やまへには）　薩雄乃祢良比（さつをのねらひ）　恐跡（かしこけど）　小壮鹿鳴成（をしかなくなり）
妻之眼乎欲焉（つまのめをほり）　（『萬葉集』巻十、2149）
是貞親王家歌合の歌　忠岑

山里は秋こそことにわびしけれしかのなく音に目をさましつ、　（『古今集』秋上、214）

奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき　（同、215、詠人不知）

次の歌を見よう。

秋の田のかりほにきゐるいなかたのいなとも人にいはましものを　（神宮）

（冷泉16、神宮44、静嘉56、歌仙60）

この歌は第三句「いなかたの」迄が「否」を導き出す序詞であり、「否」と相手を拒絶していたならば、と仮想しているから、現実には詠者は相手の男を拒絶出来ず、辛い思いに苛まれているのであろう。「いなかた」の語は未詳であるが、冷泉家本ではこの部分が「いなごまろ」となっている事、「きゐる」という行為を行うものである事から、虫か鳥と想定される。猶、『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の虫から取られた童の名に「いなかたち」とあり、これが「いなかた」に由来する名であるとすれば虫という事になる。

さて、この「いなかた」の語は『小町集』の他には、『経信集』の桂の田を詠む歌に一例見られる。

見秋田

きりはる、かどたのうへのいなかたのあらはれわたるあきのゆふぐれ　（『経信集』Ⅲ104）

「桂」は貴族の別荘地であり、『金葉集』や『散木奇歌集』には「桂の山里」の語も見出せる。そこで詠まれた「田」の歌に「いなかた」が詠み込まれている事に注意したい。

また『源氏物語』の郊外の自然描写に屏風絵の影響が見られる事については片野達郎氏の指摘があるが[注27]、「山里」である小野の描写に、秋の「田」が登場している。

人のけはひいと少なう、木枯らしの吹き払ひたるに、鹿はたゞまがきのもとにたゝずみつゝ、山田の引板にもおどろかず、色濃き稲どもの中にまじりてうち鳴くも、愁へ顔なり。　（「夕霧」④一二六～一二七頁）

門田の稲刈るとて、所につけたる物まねびしつゝ、若き女どもは歌うたひけうじあへり。

（「手習」⑤三三九～三四〇頁）

これらは夕霧が落葉宮を得ようとする箇所と、中将が出家前の浮舟の姿を見る箇所の前、意識を回復した浮舟の小野での生活の中で描かれる、小野の風景描写である。この二つの部分は都の男と山里の女とを描いており、前述した屏風絵の「山里の恋」の影響が考えられるが、そこに「田」が描かれている事は、当時の屏風絵に描かれた「山里」の中に「田」の光景も含まれていた可能性を示唆する。「秋のたの」歌の上三句が描くのも、秋の山

里の光景なのではないか。

次の歌を見よう。

卯の花のさける垣ねは時ならぬ我ごとぞなく鶯の声　（神宮）

（冷泉家本なし、神宮36、静嘉55、歌仙59）

ここでは第一句「卯」に「憂」、第四句「なく」に鶯が「鳴く」事と詠者が「泣く」事、そして第五句「鶯」に「憂く干ず」が掛けられており、卯の花が咲く夏になっても鳴き続ける春の鳥、鶯に、憂さが絶える事が無く泣き続ける自分自身を重ね合わせているのだが、「卯の花」の語は「山」や「山里」のものとして詠まれる事が多い。

五月山（さつきやま）　宇能花月夜（うのはなつくよ）　霍公鳥（ほとときす）　雖聞（きけどもあかず）不飽（またなかぬかも）　又鳴鴨

（『萬葉集』巻十、1953）

山里の卯花に鶯の鳴き侍けるを　平公誠

卯花を散りにし梅にまがへてや夏の垣根に鶯の鳴く

（『拾遺集』夏、89）

山里の卯花をよめる　藤原通宗朝臣

跡絶えて来る人もなき山里にわれのみ見よと咲ける卯の花

（『後拾遺集』夏、171）

するとこの歌も「山里」で泣き続ける女の哀愁を「卯の花」と「鶯」によそえて詠んだ可能性が高いであろう。

以上三首の歌は「山里」の語こそ詠み込まれていないが、歌語から「山里」の光景が想起される歌と言えよう。そして「つまこふる」歌では相手の訪れない嘆きが、「秋のたの」歌では相手を受け入れてしまった事への後悔が、「卯の花の」歌では絶える事なき「憂さ」に泣き続けねばならない苦悩が詠まれており、当該歌と合わせて『小町集』の中で享受される事で、山里で来ぬ人を待つ〈小町〉の姿がより鮮明に浮かび上がるのである。

おわりに

以上、歌仙家集本系統の『小町集』では小町の厭世と閑居を詠んだものと位置付けられている当該歌が、本来は山里で待つ女としての〈小町〉の歌として『小町集』に収められたのではないかと述べてきた。また、『小町集』の基幹部分には当該歌の他に、「山里」の語は詠み込まれていないが、その歌語から山里で男を待つ〈小町〉の詠と認定される歌々が存在すると指摘した。

当該歌とこれらの歌々からは歌仙家集本系統にのみ収められている「山里は」歌（『古今集』九四四番歌）の如き遁世の感慨は読み取れず、寧ろ山里に於いて「世の中」即ち男女関係の憂さに苦しむ女の姿がありありと浮かび上がる。山里の持つ隔絶の機能は遁世を望む女を「世の中」から隠してくれるものであったが、そこで男を待つ

女にとってその機能は負の方向に働く。『小町集』の初発段階に於ける「山里」は決して「世のうきよりは住み良」い空間ではなく、寧ろ「世のうき」ことがその侭に持ち込まれる、来ぬ男を待つ空間であった。

注

(1) 片桐洋一『小野小町追跡』(一九七五年、笠間書院)

(2) 『小町集』所収歌の増補の主因を『古今集』『後撰集』との表現の共通性に見るのが田中喜美春『小町時雨』(一九八四年、風間書房)、弱く哀れな説話的〈小町〉像が増補に関わると見るのが注1前掲書である。

(3) 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集七』(一九九九年、朝日新聞社)所収の、唐草装飾本三十六人集中の『小野小町集』であり、孤本で、平安後期の書写。『後撰集』の小町関係歌が一切見えず、この原本が『後撰集』から小町関係歌を採歌する以前に成立していた可能性がある。

(4) 十二世紀初頭に書写された西本願寺本三十六人集所収の『小町集』から出た本文であり、西本願寺本とも。本稿では引用テキストとして『私家集大成』所収の神宮文庫本を用いた。

(5) 二〇〇〇年に『静嘉堂文庫新収古典籍』としてマイクロフィルムで公開された『小町集』で、前田善子氏の『小野小町』(一九四三年、三省堂)で紹介されている前田氏蔵異本『小町家之集』と同系統のもの。二部に分かれており、本体部分は全六八首の『小町集』で、勅撰集の名を一々挙げた後にそれぞれの所載の歌二三首を掲げたものが「被入撰集漏家集」として附されている。書写年代は近世前期か。本体部分の配列、詞書には、錯簡と思しき数首単位での配列の乱れや独自の発展の痕跡があるものの歌仙家集本系統との共通点が散見される。

(6) 『古今集』113を巻頭歌として置き、詞書を附して歌物語的に構成した部分に他本による増補を繰り返して成立したもの。他人歌及び重出歌の数が最も多いのが書陵部甲本であり、書陵部乙本系、正保版本系の順で本文が整定され、他人歌や重出歌が削除されてゆく。書陵部甲本の奥書によれば、原型の成立は安元二(一一七六)年以前。本稿では三系統を代表した引用テキストとして正保五(一六四八)年成立の正保版本(一一五首)を用い、論文内での歌仙家集本系統の歌番号は正保版本のものを用いた。

(7) 石橋敏男「小町集成立考」(『国語』四巻一号、一九五五年八月)及び注1前掲書。

(8) 本文異同は以下の通り。
○詞書（底本・冷泉家本）
山ざとにて、秋の月のおはりに、むつれしに…神宮文庫本　山里にて秋の月哀なるを…静嘉堂文庫本系統
やまざとにて秋の月を…正保版本　秋の山ざとにて…『雲葉集』（秋歌中　月部、506）　山里にて月をみてよめる…『続後拾遺集』（雑上、1029）。
○本文（底本・冷泉家本）
第一句「山さとに」…神宮文庫本、正保版本、『続後拾遺集』　第五句「秋の月かげ」…静嘉堂文庫本系統、正保版本、『雲葉集』、『続後拾遺集』。
なお、『続後拾遺集』には歌仙家集本系『小町集』から採歌されたと考えられるが、ここで当該歌は月を見て時間の経過を詠嘆する歌の中に位置付けられている。

(9) 前田善子『小野小町』（一九四三年、三省堂）

(10) 注1前掲書。なお歌仙家集本系統は当該歌と『古今集』944の他、四二番歌として「日ぐらしのなく山里の夕ぐれは風より外にとふ人もなき」（『古今集』秋上、205、詠人不知）を載せる。

(11) 島内景二「歌の論理と家集の論理―小野小町と菅原道真―」（『電気通信大学紀要』一巻一号、一九八八年六月）

(12) 笹川博司「「山里」の自然美の形成」（和泉選書142『隠遁の憧憬―平安文学論考―』二〇〇四年、和泉書院）。但し『後撰集』雑二、1172は「人の国」を「山里」と表記する。

(13) 小島孝之「「山里」の系譜」（『国語と国文学』七二巻一二号、一九九五年一二月）

(14) 斎藤由紀子「源氏物語宇治十帖における「山里」」（『国文目白』四二号、二〇〇三年二月）

(15) 静嘉堂文庫本系統では当該歌の四首前に『古今集』雑下の詠人不知の贈答（973、974）を掲げて、〈小町〉が難波に住んだとするが、この箇所は錯簡により紛れ込んだもので、本来の配列ではない事が歌仙家集本の配列との比較から分かる。

(16) 室城秀之、高野晴代、鈴木宏子校注　和歌文学大系18『小町集・業平集・遍昭集・素性集・伊勢集・猿丸集』（一九九八年、明治書院）の『小町集』解説（室城秀之氏担当）。

(17) 笹川博司「源氏物語「山里」の風景」（注12前掲書）

(18) 今西祐一郎「山里」（『国文学』二八巻一六号、一九八三年一二月）、小町谷照彦「美的空間としての山里―藤原公任」（『古今和歌集と歌ことば表現』一九九四年、岩波書店）等に指摘あり。

(19) 『日本書紀』では允恭天皇の茅渟宮行幸の際に詠んだ歌。六条家本、寛親本、永治本では757の次にあり、前田本、

天理本、伏見宮本では757の次に書き入れ。

(20) 山口博「小町闇怨」(『中古文学』二二号、一九七八年九月)

(21) 清水文雄「衣通姫の流」(『比治山女子短期大学紀要』一〇号、一九七六年三月)

(22) 後藤祥子「小野小町試論」(『日本女子大学紀要』二七号、一九七八年三月)及び、注20前掲論文に指摘あり。

(23) 歌仙家集本系統の『小町集』は「現には」歌の詞書を「やんごとなき人のしのび給に」とし、注9前掲書及び秋山虔「小野小町的なるもの」(塙選書57『王朝女流文学の形成』一九六七年、塙書房)は『古今集』の小町詠に身分の高い男性との叶わぬ恋が影響した可能性を示す。

(24) 中野方子「廃屋と琴—『古今集』の歌語と闇怨詩—」(『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』二〇〇五年、笠間書院)

(25) 中野方子「思婦と宮怨—闇怨詩における類型素材と類型表現—」(注24前掲書)

(26) 正保版本では本文が「我かた恋をあかしかねつる」となっており、自分だけが激しく相手を恋い慕っている故に眠れない、という意味となる。

(27) 片野達郎「源氏物語における絵画性の一考察—屏風絵による自然描写について—」(『文芸研究』二三号、一九五六年七月)

※『小町集』以外の本文引用は、『萬葉集』は佐竹昭広他編『補訂版　萬集集　本文篇』(一九九八年、塙書房)、私家集は全て『私家集大成』、八代集は新日本古典文学大系による。『文華秀麗集』は日本古典文学大系、『源氏物語』は新日本古典文学大系、『大和物語』『平中物語』『和泉式部日記』は新編日本古典文学全集による。なお、引用本文には私に濁点を付したり、表記を改めた所がある。

(はっとり・ゆか／名古屋大学大学院博士課程前期)